



ひらほく新聞

「ひらほく新聞」で検索!
★祝! 令和改元感謝の107号★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

神武天皇を含めて、一〇代〜二五代くらいまでの天皇は存在しなかったという学説もあり、また神話の部分を日本の教育で教えていないこともあって、初代天皇である神武天皇の即位日として『日本書紀』に記載されていた一月一日(紀元前六〇年)を新暦換算した二月一日(私の誕生日でもある)、その日本の建国記念の日について詳しく知らない人が多い。(本年度皇紀二六七九年)

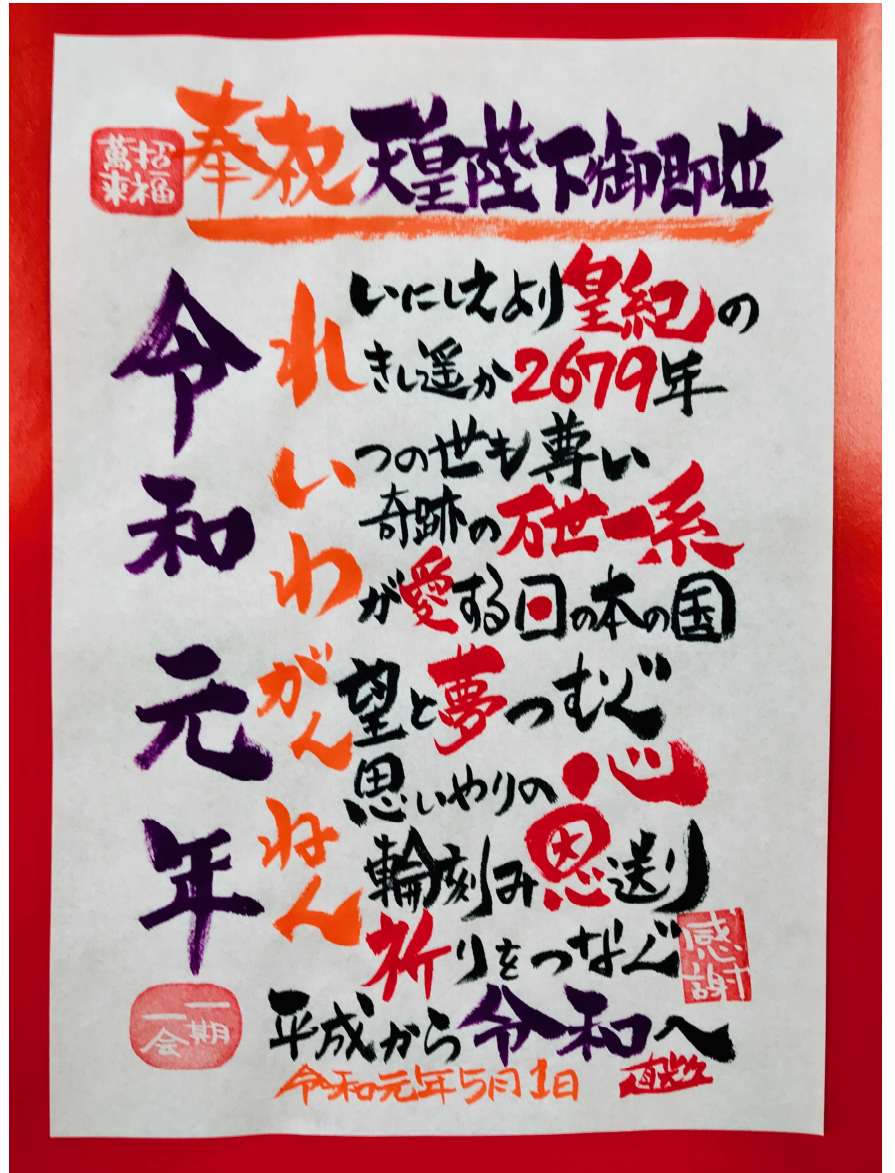
奉祝 天皇陛下御即位、謹んでお慶び申し上げます。
皇紀二六七九年、祈りは平成から新時代、令和へ。
世界から見た「日本の強さ」、「万世一系」の尊さとは? 令和元年一号は、書籍『天皇という「世界の奇跡」を持つ日本』(ケント・ギルバート著)よりご紹介します。我が「日本の国の凄さ」を少しでも多くの方に知っていただきたいと思えます。

易姓革命の中国と万世一系の日本
儒教では、徳のあるものが天子になるとされます。もし天子が徳を失えば、その一族は天に見放されて、徳を備えた一族にとって代わられます。これが「易姓革命」という王朝交代の理論なのですが、実際には、力の強いものが殺し合いによって権力の座を奪い取るわけですね。
中国の歴史は殺し合いの歴史で、反乱やクーデターで権力を奪った一族が何世代か続いて、また別の勢力に代わられる。そういうことの繰り返しです。

象徴であり、元首でもある
現在の「象徴」という語句はかなり絶妙な表現だと思ふようになりました。
天皇は国民の精神的な拠りどころでもあるし、たし

かに国民統合の象徴でもある。そして、「元首」以上の存在でもあります。
現在の天皇には、名目上であつても軍隊や自衛隊の指揮権はありません。自衛隊の最高指揮官は総理大臣です。建前上の権限すらもないのに「元首」と明記するのは、ほかの国と比較した際に、どうしても一段、低い意味での「元首」になります。

「引き続き自己研鑽に努めながら、過去の天皇のなさりを心にとどめ、国民を思い、国民のために祈るとともに、西陛下がなさつておられるように、国民に常に寄り添い、人々と共に喜び、あるいは共に悲しみながら、象徴としての務めを果たしてまいりたいと思ひます」
「皇室の在り方に関しては、国民と心を共にし、苦楽を共にする皇室、ということが基本であり、これは時代を超えて受け継がれてきているものだと思います。過去の天皇が歩んでこられた道と、天皇は日本国及び日本国民統合の象徴であるとの日本国憲法の規定に思いを致し、国民と苦楽を共にしながら、国民の幸せを願い、象徴とはどうあるべきか、その望ましい在り方を求め続けることが大切であるとの考えは、今も変わっておりません」
「同時に、その時代時代新しい風が吹くように、皇室の在り方もその時代時代によって変わってくるものと思ひます。
私も、過去から様々なことを学び、古くからの伝統をしっかり引き継いでいくとともに、それぞれの時代にに応じて求められる皇室の在り方を追い求めていきたいと思ひます」



一方、日本の皇統の歴史を振り返ると、易姓革命のような殺し合いによる権力の争奪が一度も見られませんが、いさ、少し語弊があるかもしれない。脈々と続く天皇の系譜にも、皇統内部での血なまぐさい権力奪奪はありました。また、皇統外からの乗っ取り危機に直面したことも何度かありました。また、乗っ取りではありませんが、皇位継承権をめぐる、鎌倉幕府に対して天皇自らクーデターを起こした後醍醐天皇の例もあります。

しかし、そうした危機はあつても、皇室の地位を簞奪されるまでには至らないのです。
それはなぜかと考えたとき、やはり秘密は「血」にあるのではないかという結論に辿りつきます。易姓革命でも王権神授説でも覆すことができない、天孫降臨から子々孫々と伝わる「万世一系の血」の圧倒的な説得力が、皇統を支えてきたのではないのでしょうか。

戦争のない「平和が達成される」という意味を込めた「平成」から引き継がれる思いは新時代「令和」へ。
私たちはその歴史的な瞬間を皆一緒に経験します。
御即位の新天地陛下は、お誕生日に際しての本年二月の記者会見で次のように話されております。

小さな人生論

昨年十月のドラフト会議で入団が決定した新人団選手二人が、致知出版社発行のシリーズ累計六十五万部の『小さな人生論』を携えて入寮したという。ともに、昨年夏の甲子園を湧かせた、金足農業高校・吉田光輝選手と大阪桐蔭高校・横川凱選手。吉田選手は、栗山監督から宿題として贈られたといい、横川選手は、母方の叔父からセットをプレゼントされたとのこと。

『生きる』

一人の人間が生まれるためには二人の両親がいる。その両親が生まれるためには、それぞれ両親がいる。二代で四人、三代で八人、四代で十六人である。

このように命の起源をさかのぼっていくと、二十代で百四万八千五百七十六人、二十五代で三千三百五十五万四千四百三十二人、三十代で十億七千三百七十四万八千二百四十四人、という人数になる。五十代、六十代とさかのぼれば、天文学的数字となる。

その祖先のうち、もし一人でも欠けていたら、私たちの命はない。命の炎が一回も途切れることなく連続と続いてきたからこそ、私たちはいま、この世に生きている。先祖からの命の炎を託されて、私たちはこの世を生きている。

万世一系

この事実を受け止める時、肅然とした気持ちにならざるを得ない。

生きるとは単に生き永らえることではない。先祖から預かった命の炎を精一杯燃やしていくことである。

(終わり)

この内容は、10年以上毎年受け入れている中学生の職場体験学習の最後に「何のために働くのか」と共に『いのちのお話』として、

「戦争や震災、事故などで、生きたくても生きられなかった皆さんのいのちの分まで背負って生きてゆく」ということも含めて『いのちの使い方』というお話ををお伝えしています。

左胸に手を当てて話します。「先祖から受け継いだものがココにあり、魂としてみな繋がっている。先祖が悲しむようなことは決してしない。通じているので喜んでくれるような行動を心がけよう。必ず一人ひとり、その人だけに与えられた『使命』がある。そして、いつ終わるかもしれないのちのち。だからこそ、常に目の前の今を全力で」。

こうした連続とつながるいのちの奇跡に思いを馳せらううえで、日本の皇室はまさに「世界の奇跡」です。

日本の皇室は、世界で唯一一つの系統が、約二七〇〇年も続いている「万世一系」なのです。そして、皇位継承者を男系男子の血筋のみに限定してきたため、その血統としての純粋性も、家としての連続性も、厳格に守られてきたといえるわけで、この点はイギリス王室等とも全く異なり、世界で唯一無二の存在といっても決して過言ではないということなのです。

「世界の奇跡」、ぜひ日本の多くの方々に知っていただきたいと思えます。

◎長年の超愛読紙「みやぎ中央新聞」では過去の社説の朗読動画【音で聴くみやぎ中央新聞】を定期的

に配信しています。その中から先月末にアップされた一話を次にご紹介します。

大きな夢のひと

かけらを大切に

みやぎ中央新聞

2009年4月13日号

編集長 水谷もりひと

宇宙飛行士になるための試験の一つに「絵のない真っ白なジグソーパズルを完成させる」というものがある。

は前もって完成した絵が分かってるので、やってみようという気にもなるし、だんだん完成に近づいていくと喜びも湧いてくる。

だが、全て真っ白なピースだと形だけが頼りだ。しかも、完成図がないのでやる気も起きないし、何を作っているのかも分からないので、喜びも湧かないだろう。

で、「これ、何のためにやるんですか？」と質問した人は、まず宇宙飛行士の選抜から外される。そして「はい、やめてください」という合図のあと、「ここまでしかできませんでしたが、合格ですか？不合格ですか？」と質問する人も落とされる。

どういった人が宇宙飛行士に適しているかというところ、時間切れで終わった後、「これ、持って帰っていいですか？中途半端で終わると気持ちが悪いです、持って帰って完成させたいんです」という人だそう。

宇宙船の中は狭い。しかも、4、5人の仲間とずっと一緒に過ごす。だから協調性が求められる。言われたことを素直に受け止め、あまり余計なことは考え

ず、淡々と、忍耐強く仕事に取り組める人でないといけないというわけである。

しかし、今日ここで言いたいのは、宇宙飛行士の適性の話ではない。ジグソーパズルの奥深い話である。

作家の喜多川泰さんは著書『賢者の書』の中でこんなたとえ話をしている。

ある人がジグソーパズルの1個のピースを手にした。それはシマウマの頭の部分の絵柄だった。次に手にしたピースは、シマウマのクビの絵柄だった。

「これはここだ！」喜んでそれを頭のピースの横にはめ込む。ぴったり合うと嬉しいので、またその隣のピースを捜し求める。

ところが次に手にしたのは、黒一色のピース。どこかの部分なのか全く分からない。もし、完成図が分かっていたら、そのパズルを完成させるのに必要なピースであることは分かるのだが、完成図のないパズルだったら、それがパズルの一部であることすら分からないので、それを大切に取っておくことも出来ない。

『賢者の書』に登場する主人公の少年は、賢者からジグソーパズルの話を教えられる。

大きな絵、つまり、大きな夢を思い描く。そしてそ

の夢の実現のために行動を起こす。

行動の結果、手に入るものは、失敗でも成功でもない。絵を完成させるために不可欠なピースの一つである。

1個のピース(行動の結果)は、自らの思い描いた絵を完成させるために、どうしても必要なのだ。絵が完成したときに、あのわけの分からなかったピースが、どこでどう使われているのかが、ようやく分かるんだ。

あのつらい経験が、ここに使われることになっていったんだ、あの失敗がなかったら、ここを埋めることができなかったんだ。といった具合に……

この本、20代のときに出会った。でも、今出会ったことで、こうして多くの人に紹介できる。

『賢者の書』
お薦めの一冊である。
あなたの人生に……

(終わり)

平成回顧

平成初期、バブルの終わりを少し味わい、辛い出来事、失態も経験しました。

その後の平成中盤では、縁あってご当地平塚で新聞店を任されました。すべて「人

の縁を大切に」と教えてくれた仕事の師匠のおかげであり、現在も有難くお付き合いさせていただいております。

ミニコミ「ひらほく新聞」の創刊が平成22年。当初はクイズなども入れた子ども向けでしたが、その後、「みやぎ中央新聞」と出会い、「リスバクト」(笑)、現在のよう内容に変わってきました。その後、「みやぎ中央新聞神奈川読者会」に参加して、水谷編集長、松田代表とも有難く縁をいただきました。

上記のお話に登場する、喜多川泰さんとも、同時期に講演会での出会い、以来たくさん素晴らしい感動書籍を拝読、また映画化された『また、必ず会おう』と誰もが言った。』の上映会も3カ所で開催させていただきました。

例えば、特にこの最後の10年、いわゆる「類友の法則」(同じ思いを持つ人と人が必然の如く出会う)、その引き寄せを実感する数え切れないほどの素敵な方々との有難い出会い(出逢)がありました。

おかげさまでどんな出来事、どんな1個のピースも「すべては今のためだったこと」と少しは理解できるようになりました。新時代「令和」へ、しっかりと恩送りしてまいります。